

## レムブランドの創作に就ての瞑想

原 隆 二一

十七世紀の和蘭陀に於ける傑出せる畫家、更に奇跡<sup>ミラクル</sup>の畫家としてのレムブランドを知つたのは、私が中學時代繪畫部に於て彼に就ての大體の概念を與へられた事に始る。

其の後私が宗教に多くの關心を持つやうになつてからも適偶彼に就ての二三の書物を讀んで、彼が單なる小市民的畫家でなかつたことに喜びを感じた。彼は實に神祕的畫家であつたのである。と同時にその専門的な技術上の偉大さを超へて、その外貌をすら必要としない程にたゞの「人間」であつたのである。此のことは脚本作家或は譚語作家としてのゲエテに就ても、「ソナタ」作家としてのベエトーヴェンに於ても言へる事である。

彼の晩年の作には殆ど一人の女の像が描かれて居る、と言ふよりも靈魂が描かれて居ると言ふことが出来る。即ち彼女が此の畫家によつて捉へられた瞬間に生活して

居たであらう。總べての生活雰圍氣——涙や、笑ひや、苦惱や、歡喜が靈魂に落す陰影と言ふやうなものが他の一切のものより多く描かれて居る、と言ふ事は如何なる人が見ても感ずることである。

此の意味で彼は、たゞ一枚のポートレートでさへも充分悲劇的な効果を與へて居ると思へるのである。

斯かるものは他の單に審美的な動機から描く如何なる大家のそれにも似てゐない。此處に於て彼が基督を描き、その受難の諸相を描くとき、如何なる効果を與へるであらうか、疑ひもなく充分なる宗教的効果を與へるのである。

×

彼と同時代の畫家であり、そして和蘭陀の美術界を代表する、メッツも、ステインも、テルブルグも、クレスベツケも、其他二三の人々も、所謂美學上のテイヌの法

則に従つて居ると言つていふ、彼等は皆等しくその靜謐な、平明な、そして市民的、逸樂的な當時の國土の情趣を帯びて居ると見られる。彼等に於ては其の作品は聖典或は歴史より流れ出るところの偉大なる想念にまで高められたことはなかつた。それはまた彼等自身の生活の外廓を通じて、その核心にまで穿ち入るところの悲哀や絶望をも感じなかつたし、又全人類の感情をその心臓の奥底に潜むる術をも知らず、況や其の魂の叫びを表現することは及びもつかないことであつたに違ひない。

此等藝術家の間に在つて、レムブラントは正に奇跡の如く顯れた。十三世紀に於けるダンテの藝術、十六世紀に於けるセクスピア及びミケル・アンゼロの藝術に匹敵するものを彼の時代に對して打ち樹てたのである。

彼はあらゆる種族、あらゆる時代、あらゆる國土を超えた高さに於て立つて居たと私は思ふ。此の意味に於て若し彼が吾々大和民族の祖先として生れることが許されたなら、彼は吾々が信奉する宗教に取材した幾多の創作を通して、彼獨特の靈魂の世界を見出すと共に、人々に人間的な宗教觀を與へたに違ひない。何故ならば歴史はその事が歐洲に行はれた事を傳へ、又行はれつゝあることを教へるからである。

しかし乍ら十七世紀の和蘭陀は彼には隔離した存在でしかなかつた。そして彼を理解もせず、援けもせず、況や歡びもしなかつた。

宗祖が鎌倉幕府に容れられずして、幾多の困難に遭はれたのも當時の社會狀勢からして、その教義が餘りに奇異で且つ偉大であつたからである。いや恐ろしかつたのかも知れない、その結果としての四箇の大難である事は疑ふ餘地がない。

レムブラントは十七世紀の和蘭陀にとつては餘りに神秘的で、また偉大であつたのである。彼は實にその何れの地に生るゝも良かつたし、又何れの時に生るゝも其藝術は變るところがなかつたであらう。彼が夫の「夜番」を描いたのも、さう言つた本質的不變性を有して居たから爲し得た業なのである。

偕て十七世紀以降に於ける和蘭陀美術の代表者と云へば前記の小市民的藝術家達就中、ミイレベルトやヴン・デル・ヘルスト等であるが、それは狭い意味に於ける代表であつて、後に此れ等の藝術家達がその榮譽ある壇上から引き下ろされて、低級な位置を以て満足しなければならなくなつたのは、全歐洲が先んじて、レムブラントの偉大さを認識し、之を宣傳し始めたからに他ならない



のである。

×

「古代藝術に於ける神的美は、彼の創作の手に依つて熱情的な現世的眞實味に變つた」とベルハアレンは言つて居るが、事實私のやうな繪畫に經驗の淺い素人が見ても（勿論複寫版ではあるが）彼の基督、聖母、ベヌス、ダナエ等々は、そのあらゆる畸形以外に、病根及び醜惡をさへもつてゐて、これによつて人間感が刺戟される。即ちそれは我々に近く、否我々自身であるが如くにさへ性格化せられてゐるのである。換言すれば嘗て藝術の中にあらわれた人々に決して見なかつた程度にまで性格化せられても居るのである。

彼の創作を代表するものに有名な三種の描寫がある。

即ち「解剖」（一六三二）、「夜番」（一六四二）、「サンディクス」（一六六一）の三である。かゝる種別は或は彼の全作品の密林を探究する上に、ある方法を與へる便宜があるかも知れないが、然しそれは唯皮層的で、危險性を有すると思へない、なぜならばレムブランドの創作に對する描寫法は一つの他の方法を始むるために、現在にある一つの描寫法を用ひるといふやうなことをしなかつたからである。彼はラストマンの影響を除く外は、如何

なる影響にも及ぼされなかつた。彼はたゞ一つの描寫法即ち彼自身の描寫法によつて描いたと言ふか、或はまたその描寫法に無限性を持つてゐたと言ふことが出来るのみである。それは彼の驚くべき自己の革新が、十年毎にまた年々にさへなされたことを知る時肯かれるところである。

かくて彼が、その様式を益々擴くし、その描寫を自由にし、豊富な傲奢な色彩適用によつてその眼を養ひ、濃く深き色の量に慣れ、己れを擧げてさうした生活の中に赴かんとしたことは、實に彼のその次に於てせる努力であつた。彼は今や思ひ切つて、たゞ彼自身のうちにのみ聽き、彼自身だけで了解することを始めた。そうして最も速かに彼自身を征服しつくしたのである。その結果レムブランドは容易に了解されることが出来た。何故ならば彼は何よりも畫家として止つてゐたからである。だがやがて彼は「幻影を見る人」となりかけたのである。

私も始めにさう言つたが、人もレムブランドを定むるに「奇跡の畫家」とすることが出来る。彼が創造して以て凡ての時代の藝術に贈物したところの、彼のあらゆる藝術、色、幻術的な光線、それらは皆彼をこの最高の使命に適せしめた。彼は決して單なる宗教的藝術家でな

かつたと敢て言ひ度ひ、またたゞの空想的な悲劇的作者でもなく、と言つてまた描かれたる夢の喚起者でも、象徴の創造家でもなかつた。然らば彼は一體何であらう。彼は只常に、超自然を自然たらしむるところの人であつた以外の何人でもなかつたのである。彼の筆の下には、奇跡は眞に起つたと思へない。それ程彼はそれを深い、犇々人に迫るところの人間味を以て成就したのである。

×

又レムブランドは宗教と藝術との交渉を如何に爲したであらうか、宗教と藝術とは、そのいづれかゞ他の一方に屬する必然性を有する。何故ならば此の事がなくして宗教と藝術との一致性は認めることが不可能だからである。觀念論の立場に於て、その根本原理、根本過程たる眞、善、美、聖の融然一致境たる、ユートピアこそ宗教と藝術とで見出される美しい觀念の世界がその大部分を爲すことは、或る一面に於て肯けることである。此處に於てか、宗教は藝術に屬すべきか、藝術は宗教に屬すべきかの問題が必要である。

ステイルネルは其の「藝術と宗教」の中に「單に詩人ホオマアやヘシオドのみが、希臘の神を作つた」ばかり

でなく、その他のものも亦藝術家として宗教を作つたのである。よし彼等が藝術家と言ふ名前を附せられて、取るに足らぬものとして輕蔑されやうとも。藝術は初めであり、宗教のアルファである。宗教は終りであり、藝術のオメガである。否それ以上に宗教は藝術の従者である」と言ひ。又ヘエゲルは宗教以前に藝術を論じて居る。言ふ迄もなく此等はその段階の論を出でない。宗教と藝術との價値的問題では決してない。只宗教の立脚地は藝術に存するに過ぎないと言ふことなのである。此の意味に於て私は宗教が藝術に屬することを肯定する。即ち藝術は宗教を作るの言を敢て否定しないのである。

その過程に於て、宗教は藝術とは對立的な道をたどるものである。即ち宗教は藝術家が作つた目的を、それが屬して居る内部へ取り戻して、再びそれを主體と爲さんとするのである。此の事は世界のあらゆる宗教に、具體的に妥當であるかどうかは知らないが、今レムブランドに於ては彼が藝術家であると言ふことが有利な材料になるが、事實爲された事に對して吾々は否定することが出来ないのである。又彼が單なる神的畫家から次第に「幻影を見る人」になりかけた事實を知るとき、猶更の感が深いのである。



彼は正しく藝術によつて宗教の世界を覗つた、即ち自己の作品に宗教を見出したのである。何故と言ふに、彼は殆んど謀るべからざる感覺によつて、神秘と生命とを一つに掴み、それを創作的に同じ焰の中で一致せしめたことがそれである。

x

東西古今を問はず、その時代と環境から距離れた幾多の傑出せる人物は存在もし、又現在も存在しつゝあるであらう。併し此れには、その時代と環境から除けられた者と、自ら自由に離れて居るものとの區別を生ずる。

今レムブランドは後者に屬するのであるが、その結果として容れられなかつたのは寧ろ當然である。彼の如き先見的才能を以て爲すその作品がやがては廣く了解される運命にあつたことは必然性を有する。此の事を實證するものとして、彼の藝術が十九世紀に到つて始めて認められたことを擧げなければならない。實に十九世紀程藝術が一般生活に穿ち入つたことは未だない事である。

嘗ては贅澤の花であり、王候や上層の人々の持囃し物であつた藝術が一般生活に穿入したと言ふことは、一つに革命のおかげである。そして繪畫に於てもレムブランドのその如き迫力に満ちた、所謂自然を超へた現實的

な作品に多くの關心を有するやうになつたのである。

ルウベンスやテイチアンはその作品から焰と靈とを剝いだ、そしてその傑作と稱するものは、たゞ生命の美しい外形の讚美に過ぎなかつたやうである。彼等は瞥見は持つた。しかしながら眞實の幻影は持たなかつたのである。

併しレムブランドは、ダンテやセクスピアの如く、一人の「見る」人であつた。未だ嘗つて畫家に彼の如き人は一人もなかつた。そしてそれ故に彼はあらゆる畫家の上に聳えて居る。嚴然とその地位は不動である。そうして永久にそうであることを信ずる。

何事にも魂に呼びかけた、ものであることが望ましい。それは決して無意味に終ることがないからである。

【丁】

### 川 三 題

田 川 惠 良

川岸の舟に荷積むや夏柳  
釣落す魚の太さや秋の川  
舟底を焼く冬川のはとりかな